

# 健康通信 しずおか

No.21

2014  
2月

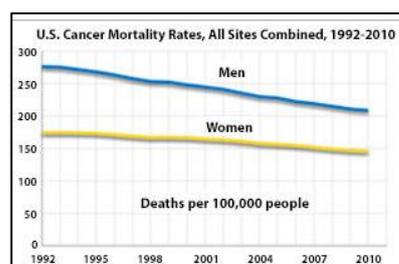
## TRANSITION TO HEALTH (021)

### 「早期発見」から「健康の創造」へ ②

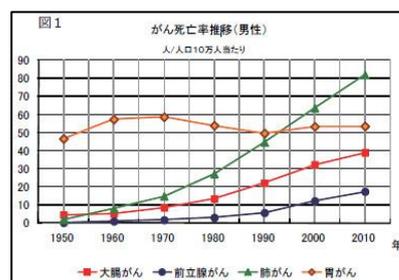
～ アメリカに学ぶ 世界のがん医療の流れ ～

#### はじめに・・・がん死亡率が増え続ける日本

過去20年以上、アメリカの癌死亡は着実に減少してきている(右図・National Cancer Institute のHPより)。ところが、ご承知のように日本では、胃がんを除く他の臓器の癌死亡は確実に増え続けている(右下図・健康通信しずおか No.1 より 男性・臓器別癌死亡率)。日本の癌治療は三大療法(手術、放射線、抗癌剤)が主体で代替療法は保険適用外である。日本の癌患者さんの2割は三大療法の挙句、免疫力を叩かれ、凶悪化した癌の逆襲を受けて癌死している。ところが、8割の患者さんは癌死ではなく、治療が招いた呼吸器感染症や心不全、多臓器不全などで治療死しているという。癌専門医のほぼ100%は、自分が癌になったら三大療法を拒否して代替療法に逃げるつもりでいるという(船瀬俊介氏)。



今回は、「アメリカ上院栄養問題特別委員会レポート いまの食生活では早死にする」「ガン勝利者 25 人の証言」(以上、故・今村光一氏著)「ガンで死んだら 110 番」「抗癌剤で殺される」「病院に行かずに『治す』ガン療法」「抗ガン剤の悪夢」(以上、船瀬俊介氏著)及び



National Cancer Institute のHP等の情報を引用・参考にしながら、私が今までに知り得た真の情報をお伝えします。

#### がん増加の歴史的背景

アメリカでは1913年以降の自然療法の弾圧(前号参照)、戦後の食料革命(牛乳・肉食信仰、加工食品、ファスト・フードなど)等により、1960年代、戦前では稀であった癌・心臓病・糖尿病などの病気が激増したのであった。

1969年、癌治療に関してカリフォルニア大学のハーディン・ジェームス博士が、「典型的な種類の癌では治療を拒否した患者の平均余命は12年6ヶ月、外科手術などの治療を受けた患者の平均余命は3年」と発表していた。つまり、当時、三大療法を拒否した無治療の患者の方が4倍長生きしていたのである。

癌患者の平均余命 (1969年)	
治療群	3年
無治療群	12年6か月
H. James (California Univ.)	

1971年、ニクソン大統領は“War on Cancer”をスローガンに癌撲滅運動

を展開した。1977年、「米国上院栄養問題特別委員会」報告：いわゆるマクガバン報告「食習慣によるガン予防」では、「ガンや心臓病などの増加は食生活の誤りに因る」と指摘され、肉・卵・乳製品・砂糖などの摂取を控え穀物中心

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原6丁目8番1号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

の食事するように提案された。1982年には、公衆栄養情報委員会報告『食物・栄養とガン』として全米科学アカデミー（NAS）から「食習慣と健康に関する研究レポート」が発表され、「動物性食品（肉・乳製品・卵）の過剰摂取がガンの強力な要因となっている」と結論づけられた（「健康通信しずおか No.4 アメリカの反省に学びましょう」）。

## 1985年『デヴータ証言』 NCI 所長による議会証言「抗癌剤は無力」

1985年、アメリカ国立がん研究所（NCI：National Cancer Institute）のVince DeVita（デヴータ）所長が「分子生物学的にみても、抗癌剤で癌が治せないことは理論的にはっきりした」とアメリカ下院議会で証言した（『デヴータ証言』）。癌の化学療法は絶望的で、抗癌剤を投与すると、一時的に一部の患者に腫瘍縮小効果がみられるが、直ぐに癌細胞は抗癌剤の毒性に対して、反抗癌剤遺伝子 [Anti-drug gene：ADG] を変化させて無力化し、より強暴・凶悪な“SUPER CANCER（スーパー・キャンサー）”と化して逆襲してくるのである。

また、この年、アメリカ東部のニューヨーク大学、シカゴ大学など20施設ほどの大学・医療機関の合同研究報告で、抗癌剤・放射線治療の効果は決定的に否定されたのであった。（いわゆる「東海岸レポート」）

## 1988年 NCI レポート・・・「抗癌剤は増癌剤である」

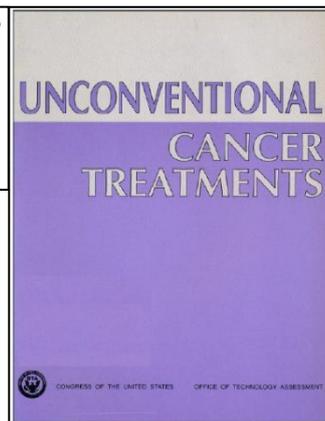
アメリカ国立がん研究所（NCI）は『ガンの病因学』を発表し、「抗癌剤は強力な発癌性物質であり、投与された癌患者の癌を何倍にも増やしたり、また、別の臓器・器官に新たな二次癌を発生させる造癌剤である」と断定した。

## 1990年9月 OTA レポート・・・代替療法へシフト、自然療法普及へ

1988年、アメリカ上下両院議員40名は連名で、OTA に「自然療法」を調査する専門プロジェクトを発足させた。

OTAとは Office Of Technology Assessment の略で基礎調査を行うアメリカ議会・調査専門部門である。

Unconventional Cancer Treatments  
September 1990  
OTA-H-405  
NTIS order #PB91-104893



OTAの“ヘルス・プログラム”という癌問題調査委員会が、癌非通常療法（代替療法：Unconventional Cancer Treatments）の徹底調査を進めた。OTAは「『通常療法』では『治らない』とされた末期癌患者が、『自然療法』でたくさん『治っている』。議会はこれらの療法を詳しく調査し、国民に知らせる義務がある。」と主張して、これら『非通常療法（自然療法）』の成果を、正当に評価する作業を進めたのである。

そして纏め上げられたのがOTAレポートで、indexの最終頁で300ページとなる膨大な報告書である（上写真）。食事、栄養、瞑想、運動、呼吸、心理、イメージ、笑いなどの療法は全てOTAの自然療法に含まれる（下表）。

アメリカ政府は、このOTAレポートで「従来の“癌の三大療法”より『自然療法』の方が、癌を治す」と断定した。これは癌治療に対する歴史的な turning point となったのである。

アメリカ政府・NCIは、「自然療法」に対する国民の関心に答えられるよう体制を整備し、「自然療法」の成果をより詳細に評価し、有効な「自然療法」の保険適用を進めてきたのである。

### OTA レポート 癌の「自然療法」5分野

- ①行動・心理療法
- ②食事療法
- ③ハーブ療法
- ④薬物・生物学的療法（石油由来の合成化学薬品ではなく自然界から抽出した薬効成分）
- ⑤免疫増強療法（日本語訳・丸山）

『デヴータ証言』から20年後の2005年、Vince DeVita氏（右写真）は、あるインタビューに答え、「自然療法の普及と癌死亡率の低下」という成果に満足し喜ばれていた。今から9年前、既にアメリカでは、癌治療法の比率は「三大療法：自然療法＝4：6」と、自然療法が優位となっていたのである。ところが、現在の日本では未だに「三大療法：自然療法＝10：0」のままである。



## おわりに

日本の癌治療の惨状について船瀬氏は、「抗癌剤の使用率はカナダの約20倍、手術は17倍、放射線は当て放題。これが欧米との絶望的な格差です」と述べている。私も日本の癌治療の現状に絶望感を覚えている。ある学会や研究会で、某県立がんセンター（静岡県ではない）の呼吸器内科部長や某大学医学部（浜松医大ではない）の放射線科教授らも、『デヴータ証言』『NCI レポート』『OTA レポート』の存在すら知らなかったことに唾然とし絶望感を覚えた経験がある。これが日本の現状である。100年ほど前から弾圧されてきた『自然療法』を、24年前からアメリカ政府機関が『高く評価し普及』させてきた事実を、日本の癌専門医の大部分は知らないか、あるいは、口を閉ざしているのである。